

回教世界(バウマン)(二)

物的資源。併し回教世界に主として缺けてゐるのは物質資源の方面である、次表は此の事情を明示するため二十二種の物に就て記してある。其の中で今日多少ともに著しい發達を見せてゐるのは燐礦、滿俺、錫及び石油の四つである、第五に石炭も著しい發達を爲るでもあらうが、

商
品
括弧内は一九一三年世界生産額

石炭(一三四、三三、(00噸)

地方

一九一三年
生產額

埋藏量（一九一三年世界生産額ニ對スル割合）

大、主としてバイカル湖の西

石油(五、七、〇〇〇バレル(一九二八))

ア埃波蘭フウガバ
ル領エラロ
ゼ東ルズ
リ印ガスニ
ヤ及斯度ナイ
等

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

150% (?)

鐵*〔註〕17(00(噴))

アルゼリヤ
チユニス
土耳其

1,316,000
四八,000
六,000

100%
50%

南ウラルを含む

銅九銖〇〇噸

ア土露
ル
ゼリ
ヤ其亞

三、平

鉛*〔三三、〇〇〇噸〕

亞鉛*〔三六、九〇〇噸〕

金*〔四、〇〇〇、〇〇〇弗〕

銀*〔三、四〇〇、〇〇〇オンス〕

水銀*〔一〇、〇〇〇フラスク〕

錫*〔三、七〇〇噸〕

滿俺〔三、〇〇〇噸〕

安質母尼*〔二九、九〇〇噸〕

格魯謨鐵鑽〔七、〇〇〇噸〕

タンガステン〔八、二〇〇噸〕

チアル
エニ
土ル
及耳
其セ
ヤリ
ス

100%

チアル
エニ
土ル
及耳
其セ
ヤリ
ス

50%

馬蘭
領東
土來
耳諸
及州
其度

馬蘭
領東
土來
耳諸
及州
其度

土耳
其

馬蘭
領東
土來
耳諸
及州
其度

高加
索

土耳
其

土耳
其

馬來
諸州

數百萬噸

20%

シヨル
ジャ

60%

ニ三〇〇%
ニ三〇〇%
ツヤグ近傍

二、二八五、〇〇〇	三、七九二、〇〇〇
三七八、〇〇〇	三、一七二、〇〇〇
一五二、〇〇〇	六、五〇〇、〇〇〇
一〇四、〇〇〇	六、一〇〇、〇〇〇

五、四、七、四
000、000、000、000
000、000、000、000
000、000、000、000

五、四、七、四
000、000、000、000
000、000、000、000
000、000、000、000

1700-0000
1700-0000
1700-0000
1700-0000

五、五〇〇、〇〇〇
一八〇、〇〇〇、〇〇〇

五、一、〇〇〇、〇〇〇
一、六、二〇〇、〇〇〇
七、九〇〇、〇〇〇
四、四、四、〇〇〇
一、〇〇〇、〇〇〇

1000-000	175
1000-000	175
1000-000	175

*は鑽石にあらず金屬なることを示す

モスレム世界に前記四種の物が多く産するといふ限られた利點の價值も、其等の物の分布狀態が思はしくないため差引きされてゐる。燐鑛は専ら佛領北アフリカにあり、歐人の支配より脱せんとせず先づ必らず海上を統御すべく、滿俺はジョルジャに産するが、自身此を用ふるがためよりは主として敵から價值ある商品を得る手段として、回教國が此を支配してゐるといふことが重要なのである。錫は専ら海峽植民地方面に産し、此が開發、運送共に海上支配によつて決定される、其上此が回教徒の手に残つたとしても、此を用ひ得るまでの遠い距離と道中の危險とを考に入れねばならぬ。石油は比較的廣く分布してゐるが、主たる中心は高加索のバクで、殆ど全生産量が露西亞内部で消費され來つてゐるから、戦時にバク油の供給を絶つとも戦争の結果に重大な關係はない。斯くて現代の意義に於ける持續的戦争が、回教世界をれ自身の技術上の熟練と資源とによつて支持さるゝ限りに於ては問題外なること明らかである。

邊境管理の政策。回教世界の政治地理を相爭へる國々の活動について或る一定の方向を示してゐる。能ふ限りは回教世界は其の儘に放つておくのが賢明な遣り方であると思はれるが、若し兵力を用ひなければならぬならば、高度の生産力ある軍略的地方或は石油、燐鑛、錫等の特別に軍事的活動を支持する資源の開發され得る軍略的地點に於て此を用ふべきであると思はれる。之は亦た一般的歴史發展の方向でもあるが、必らずしも此の通りになつて來たのではない。回教世界と關係してゐる列強中、國策を支持するために兵力を最も賢明に用ふる法を示してゐるのは恐らく英國である。英國の活動は邊境管理の政策を表はすものと言つてよからう。英國が屢々埃及スダンに送つた兵力は強大なものでなく、小兵力を最少限の目的物に指し向け機會があれば直ぐ此を撤退した。埃及に於ける英國の兵力も常に少數に過ぐとて政府の軍事批評家の満足せざりし程である。メンボタミヤに於ても英國を出口と極く少數の軍略地點とを押

へてゐるだけで、其の最近の提案を土耳其との新しい一般條約が批難されたならば直ちに撤兵しようといふのである、そして占領の負擔を軽くするために、過去數年間遠隔の村落は飛行機を以て管理し、活潑な抵抗ある地點へは爆彈投下を行つて此を懲らすといふ方法によつてゐるアナトリアでも英國の軍艦は屢々方々の海岸入口に現はれ、海兵が上陸して一番手近な目的物を占領したが、此の占領も只だほんの暫らくの間であつた。印度の西北地方では、一方に交渉外交を行ひ他方に最少限の兵力を用ひるといふ兩手段が行はれ來つた、之が此地方では約二代に亘れる形勢である。ヘジャズは戰爭中に英國の保護の下に創られ紅海に於ける海軍の威力が其の管理に關係すること致命的である。

回教世界の自然地理と此世界に對する英國の政策が比較的 success せるを見れば、君府及其傍近の特異なる位置と此に關する問題が英人にとつて如何に重大なるかといふ事とが一層明らかになる。君府は常に回教勢力の焦點にして其の重

要なるがために何等かの形式による西歐列強の管理が保證さるゝを要するのみならず、又た如何なる事情あるとも、基督教世界に對する攻略の根據地として放任され得ない一箇の邊境地點でもある。君府の市域は北と西とにマリツア川迄伸びたが、歐羅巴との境界及びボスフォラスダルダネルスの海岸に沿ふ要塞の築かれぬ中立地帯があるため、限定的管理の下にある。後年歐羅巴が更に内紛によつて分裂するとも、此の事情が歐羅巴に於ける兵力行使及び其と同等に危険な外交的勢力の行使を防ぐこと蓋し尠少ではない。

回教世界の邊境管理政策は單に軍略上からだけでなく國家財政上からも最も綿密な研究を要するものゝやうに思はれる。管理といふことに就いては大いに意見の相違も相り得るが、苟くも管理が必須とされた以上は、此をなるべく狭い範圍内で行使することに大した異論はあるまい。過去、大戰、最近四年間の歴史は、回教人民が其の地理的環境の内に大なる力を有する同

盟者を持つてゐるので、彼等に對抗せんとする國は此の同盟者と戦はざるべからず、莫大なる戦費を抛つて遂に亡國の基を貽すことを示してゐる。其の實例は多い。佛蘭西のダマスカスへの遠征、シリアの占領は既に其の恐るべき負擔を加重しつゝあり、ローザンヌの第二次會議で土耳其の提示條件に對し、佛國はシリア駐兵の援助として更に軍隊を派遣すべきことを以て脅かした、佛國が軍隊を増派し得ることに疑はないが、其の費用は何時、また如何にして出て來るか。他面土耳其はたとひ其の領土と人民とをかなり長い間佛軍に蹂躪されても、外交上の目的を達するためには待つてゐて損にならない、土耳其の恢復が速やかであるに對して、財政上無力となり信用を失墜することは佛蘭西にとつて永久の禍害となるであらう。伊太利の經驗も佛蘭西、及び英國のメソポタミヤに於けるそれに酷似してゐる、伊太利が土耳其との戦争（一九一一年—一九二一年）によつてリビヤに獲た所は大戦中莫大の費用を以て保持された、即ち動搖常

なきセヌッシ(Senussi)がセントラルランドを占有してナイル近傍のシワ(Siwa)のオアシス迄も軍事行動に出で、英軍によつて漸く破られたのである。一九一八年休戦以來伊太利は和解の政策を採り、セヌッシの頭目と條約を結び彼を羅馬に招き、又たアルバニヤの回教徒と和解し、要するに對回教世界政策を、戦争を續ける代りに平和の裡に建設的な事業に従事するといふ方向に轉回した。其の最近の方策は最も此の點を明らかにしてゐる。一九二二年始めベンガジ(Benghazi)にキレナイカ議會が開かれたが、國王の從兄弟ウデネ太公が玉座から朗讀演説を爲し此がアラビヤ語に翻譯された、代議士六十九名中六十八名の出席あり、其の殆ど總てがセヌッシ友党所屬であつた、代議士五十四名は彼等獨特の選舉方法で選出され、七名は伊太利政府、八名はセヌッシ頭目の任命に係る、議員中僅かに二名が伊太利人である。議會後間もなく伊太利政府はトリポリタニヤに對し自治を許可せし旨を公けにした。約言すれば管理を限定的條件附

とし大いに自治を許し、而も其の國の資源や交易を實際上支配する事、之が相當の期間平和にやつて行く土臺を打立てる手段である。

回教人民の邊境所々に於ける成功の主たるものは土耳其の爲した所である。土耳其は回教世界に於ける最大の政治單位で歐大陸の大工業中心地域から最も遠い一角に位し、倫敦から海上君府への距離は紐育へのそれと同様である。此は一見回教徒にとつて全然有利の様に思はれる事であるが、回教世界そのものゝ自然地理と性質とが政治的統一に對して如何なる影響を有するかを詳しく考量してみれば、直ちに左様の考は翻さねばならない。第一に重大なのは宗派の持續的分裂である、此がモハメッドの時代から現代まで何時も先覺者の回教徒連帶の求願を妨げ來つた。回教にはスンニ (Sunnis) 註、回教經典に無きモハメッド口述の經典を信奉する宗派) 及びシャア (Shi'as) 註、スンニ派の初三代の教主を認めざる宗派) の二大宗派のみならず隨處に多數の小宗派が散在してゐる。従つて宗

教、政治何れの方面に於ても歩調を一にすることは問題外である、現在でも猶ほ昔のやうに異宗派間の争が行はれ、教主問題も未だに確たる解決に向つて居らない。さればスダン數百萬の黒人がトルキスタンのキルギス或はもつと近いベヅウインとても團結しはせぬかといふ様な考は全く空想であり、回教世界の數個地方が團結すれば大規模な侵略を爲る基礎である技術上熟練、資源、自然の形勢が具するやうに考へるのも同様に空想である。但だ歐羅巴が不和なる時此が危急の秋、重大なる邊境の地に有效なる一撃を加ふべき回教徒唯一の機會である。(完)

(ジエオグラフィカル・レヂュエー一月號より抄譯)

(小野鐵二)